

博士論文（要約）

明治後期から昭和初期までの教育問題の構成に関する研究  
——教育メディア空間の動態——

岩 田 一 正

本論文は、「教育ジャーナルや教育に関連する時事問題を報道したり論じたりする一般紙や総合雑誌、また子どもに対する教育機能を有する少年雑誌や少女雑誌、教科書などのメディアが形成する教育に関する意味空間」を「教育メディア空間」と定義し、1890年代半ばから1930年前後までの時期に、想像された共同体である教育メディア空間において教育問題の構成がどのように展開したのかを考察することを課題として、次の三点に関する分析を試みるものである。すなわち、第一に、ある時期に流布した教育に関する問題や論じ方がどのように発生し拡張したのか、第二に、それらの問題や論じ方の発生や拡張はどのような歴史的な構造や状況を基盤としていたのか、第三に本論文が分析対象とする期間に、国民教育の意味空間にどのような変容が見られたのか、という三点である。

本論文では、一等国（帝国）としての地位を確固たるものとする学制全体の改革を志向して第一次世界大戦中に設置された臨時教育会議（1917-19年）を画期とし、その設置以前を第一部、設置以後を第二部としている。第一部は国民国家に国民を統合する教育、そして国民国家を担う国民の教育が課題となる時期であり、第二部は一等国を担う国民の教育が課題となる時期であると意味づけることができる。

第一部では、第一章と第二章で1900年前後の教育事象が、第三章と第四章で1910年前後の教育事象が、教育メディア空間でどのように論じられ問題化されたのかを分析した。

第一章では、『少年世界』（博文館、1895年創刊）の投稿文を主たる史料として、第一に少年の投稿文の文体が、投稿規定改定（1902年末）によって漢文くずし体や擬古文から言文一致の口語文に劇的に変容したこと、改定の背景には掲載される投稿文が年齢の高い者による漢文くずし体や擬古文であることへの読者の不満や言文一致運動の興隆が存在したことを記述した。第二に改定によって、漢文くずし体や擬古文を綴って煩悶し、主義主張を述べる青年とは異なり、少年は天真爛漫な言文一致の口語文を綴る者と意味づけられ、少年たちは、その少年像に応じた振る舞いを投稿文を通じて実践したことを論じた。

第二章では、第二次小学校令下の検定教科書『帝国読本』（学海指針社編、1893年）は、児童を将来のために学校で教師から学ぶ存在と表象し、学習結果に応じて将来の社会的地位が配分される業績主義を浸透させようとしたが、第三次小学校令下の国定教科書『尋常小学読本』（1903-04年）は、それに加えて、児童を価値のある時期を生きる存在としても記述していることを指摘した。二つの国語読本の比較を通じて、小学校教育で学ぶことが慣行となった時期に、児童を業績主義の文脈に位置づけるとともに、独自の価値ある時期を過ごす配慮が必要な存在として価値づけていく課題が浮上してきたのであった。

第三章では、教育実践の成果を一覧化して評価するイベントの雛形ともなった全国小学校成績品展覧会（1912年）が、教育メディア空間でどのように論じられたのかを検討した。

『日本少年』、『実業之日本』、新聞、教育ジャーナルなどを史料として、第一にその展覧会が開催された経緯、また展覧会が教育の祝祭空間となっていく過程を記述し、第二に蘆田恵之助などの展覧会審査員が、教育実践の成果を審査することを通じて、教育実践の改革を主導し、教育の質や教師の専門性を担保する役割を果たし、教育メディア空間の問題構成を通じて教育実践を方向づける政治力学が作動することとなった機制を分析した。

大逆事件や中学校における学校紛擾によって、国民教育の普及が、国家の発展だけではなく、国家の危機にも繋がり得ることが認識された時期に、教育メディア空間では『万朝報』の記事を起点に「小学校教師の学力問題」（1912年）が生じ、学校教育の成果を担保する教師の専門性が問題視された。第四章では、この問題を事例として、新聞記事において小学校教師の専門性が批判的に論じられたこと、そしてその批判に対して、教育関係者が、教育の領域はその領域を知悉している者しか論じることができない固有性を有する聖域であるとする論じ方を創出し、批判に対して抵抗していった様相を分析した。

第一部で対象とした時期の教育メディア空間では、教育対象となる子どもを、独自の価値ある時期を過ごす存在として論じる問題構成が浮上する一方で、従来と同様に業績主義の文脈に位置づける問題構成も存在し、後者との関連では、教育成果の担保が課題となった。そして成果の担保などの教育問題は、教育という特異な領域を熟知する者のみが論じることができるとする、自律的な領域として教育の領域を意味づける問題構成が浮上した。

第二部では、第五章と第六章で1920年前後の教育事象が、第七章と第八章で1930年前後の教育事象が、教育メディア空間でどのように論じられ問題化されたのかを分析した。

松本虎雄の殉職（1919年）と小野さつきの殉職（1922年）は、ともに教え子を救おうとした教師の溺死事件として社会的な関心を集めたが、教育ジャーナルにおける小野の殉職の扱いは松本のそれを凌駕した。第五章では、この差異には彼女の殉職が、第一に学制頒布50周年に当たる年に生じた点、第二に女性教師が増加した時期に、東北の寒村の新任女性教師でさえ、命を擲って教育に貢献できることを示した点が関係していたことを論じるとともに、彼女の殉職を契機として、教育の領域を教師の崇高な犠牲的精神が媒介する、教師と子どもの一体感が充溢する場として表象する問題構成が増幅した過程を記述した。

第六章では、第一に、学制頒布50年記念祝典（1922年）が開催された時期に、教育が国家のあらゆる領域や活動の基盤であると論じる問題構成が、教育メディア空間で増幅した

動態を記述した。第二に、祝典を教育の祝祭空間とするために尽力した教育擁護同盟などの活動は、市町村義務教育費国庫負担金が政治的争点化した文脈に埋め込まれていたことを論じた。第三に、教育団体の活動が展開し、教育の第一義的意義を主張する問題構成が浸透していく過程で教育概念の膨張＝拡散が見られることを指摘した。そして、その活動に批判的な者による問題構成でも、教育概念の膨張＝拡散が共有されていたのであった。

第七章では第一に、1910年代から新中間層が文化生活を営む住宅地として郊外が注目を集め、1920年代半ば以降に郊外住宅地の一様式として学園都市が浮上し、学園都市の一つに成城が存在したことを概観した。第二に、『教育問題研究・全人』の1929年分に掲載された保護者の文章、朝日住宅展覧会（1929年）で建築・販売された住宅の平面図、その住宅の居住者の文章などを検討し、成城という郊外で文化生活を営む保護者が、子どもの観察に基づく環境整備の実践として教育を認識し、「我が子」の親として自身を定位する一方で、「我が子」を国家の発展とは関連づけずに記述していることを論述した。

早稲田大学同盟休校（1930年）を事例とした第八章では、第一に紛擾の発生過程を概観した。第二に新聞記事や雑誌論考などを検討し、紛擾を文部省学生部の思想統制政策の文脈で問題視するものが存在する一方で、大学運営に学生の声を組み込む制度改革を要請するものとして捉えるものも存在したことを記述した。後者は、学問研究や思想の自由を抑圧する国家やその代理である大学当局と対峙する学生という図式ではなく、学生にとって学問の場というよりも、むしろ生活の場と意識されてきた大学を、いかに学生が生活を営む共同体として構築していくのかが、紛擾の核心にあると論じていたのであった。

一等国を担う国民の教育が期待されるようになると、教育メディア空間の教育問題の構成において、1920年前後に教育と国家との繋がりは極点に達し、教育を国家の基盤となる領域として位置づける問題構成が発生し拡張した。その問題構成では教育概念が膨張＝拡散し、一等国への転換の要諦に教育が位置づけられる一方で、教育は曖昧なものとして論じられた。国民教育創出期が終焉を迎える1930年頃には、新中間層による我が子の教育の論じ方においても、大学における学校紛擾の論じ方においても、教育と国家との強固な繋がりを自明化して教育に関する問題を構成していく筋立てが現れたのであった。

1890年代半ばから1930年前後までの教育メディア空間に関する探究を通じて、本論文は第一にその空間における教育問題を構成する言説実践によって教育を巡る現実が創出されることを析出し、第二に教育メディア空間における問題構成は、事象に関する論じ方の妥当性だけでなく、その空間を包囲する歴史的な状況とも相関するゆえに、特定の時期に

教育問題化されることを指摘し、第三に教育事象を教育問題へと構成する筋立ては、筋立ての論理の要請によっても変容することを開示した。

以上の探究は、教育メディア空間に特定の言説を書き込む、その空間の外部に存在する政治力学だけではなく、教育に関する特定の教育問題を構成していく、その空間内部で展開する政治力学も対象として、教育メディア空間における教育問題の構成を分析とすることで、教育の制度史研究や思想史研究に還元し切ることのできない日本近代教育史を描出できることを明らかにするものであった。但し、探究した時期や事象は限られたものであるため、本論文で分析することができなかった時期や事例を対象として、教育問題の構成に関する分析を蓄積し、歴史的な分析と現代の同時代的な分析を接続することが、残された課題となる。